

星環

ウル リム (響)

1998年5月20日発行

第7号

題字：康秀峰

物語ることへ

古賀 久幸

コンピューターは使いようによっては、仕事の領域を広げてくれますが、トラブルが発生するとストレスの原因になってしまいます。そんな時、詳しい人に電話で解決方法を聞いたり、あるいは無理を言って来てもらったりするのですが、これまた新たなストレスの原因になったりもします。というのは、説明に用いられる単語のほとんどが初めて聞く言葉で意味が全く分からないからなのです。パソコンの売れ行きがもう一つ伸びない原因の一つでしょう。

しかし、考えてみると神学の世界こそずっと昔からそうでした。特に、日本の教会はヨーロッパ、アメリカの神学の流れを正統に踏襲することに力を注ぎ、その体系の中だけに通用する言葉によって信仰を語ってきました。それは神学の言葉であっても生命あふれる言葉ではありませんでした。教会の伝統的な言葉は人間の生きる現実に必要な言葉になりえたのでしょうか。コンピュータに詳しい人の集まる話しの輪の中にいると非常に孤独感を覚えます。その言葉では自分を語ることができないからです。神学や教会の世界にも同じ事が言えるかも知れません。

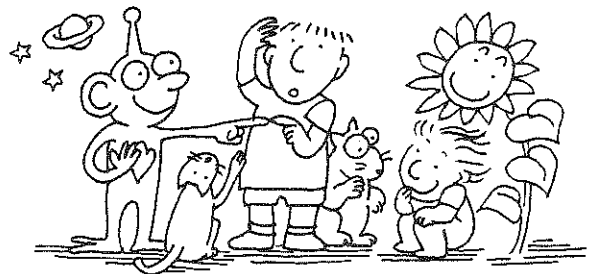
神学生生の頃、ある在日一世のおばあさんの家にお茶をよばれました。幸せだった子どもの時の思い出、そして日本の侵略による家族の崩壊と日本への渡航史。次から次へと語ってくれました。そして、「私は聖書のここが一番好きだ」とハングルの聖書をひもとき、ヨブ記を私のために日本語に読み直しながら聞かせてくれました。ヨブ記は家族を失い、病気の苦しみを無理に背負わされたヨブが辛苦の中で苦しみの意味を神に鋭く問いかける書です。おばあさんはご自身の物語をはさみながら、ヨブ記を読みました。声は激しく震え、涙が頬を伝い、やがて、日本語への訳読はふっとんで韓国語だけになり、気が付

いたときには最終章も読み終えて大きな声で泣いておられました。それはおばあさん自身の物語であると同時に世界史の流れの中で経験した民族の苦難の物語であり、神とヨブの物語と合流する場でした。神学の論理的思考ではなく、物語ることによってしか到達できない深い次元があることを体で感じた一瞬でした。

アジアの脈絡でとらえると、日本人の一つの不幸は大多数の人が、物語る自分を持っていないこと(透明な存在?)自分を語ってもそれが聖書の物語と合流しない物語でしかないということ、教会では聖書の物語と合流しても個人の敬虔なできごとにとどまっていること、ではないでしょうか。ここまで書いてなんだか気が重くなりました。

しかし、物語ることは過去のことばかりではなく、今と未来をも含むはずです。聖公会生野センターの目指す「共に生きること」それは出会いを通してそれぞれの物語を作り出していくことだと思います。そこには大きな希望があると確信します。

(こが・ひさゆき 日本聖公会京都教区奈良キリスト教会牧師・聖公会生野センター運営委員)



時のしるし

ネットワーク時代の今日、いろいろな面で、リーダーシップが求められている。リーダーシップの最たるものは、日本で言えば首相のそれであろう。歴代の首相が、その果たすべきリーダーシップを発揮してきたかといえば、意見の分かれるところだ。意見が分かれるといえば、名護の海上ヘリポートに最終的に反対表明を行った大田知事への評価が、リーダーシップの問題として論じられ、賛否両論まっぴらつに分かれたことは記憶に新しい。2年前、拒否を続けて最後の最後に結局は代理署名をした知事に対する評価も、リーダーシップ性という論点で評価が分かれた。いずれもリーダーシップの問題ではないと私は考えている。一見優柔不断のように見える知事の言動は、国家としての日本政府の抑圧的政策に対して、地方自治体の長として現状可能な最大限の主張を貫いて、県民の利益や立場をこれまた現状可能なぎりぎりのところで守り抜いたのではないか。これは絶妙なるリーダーシップであると私は思うのだが、どうだろうか。

さて、リーダーシップというと、何もこのような天下国家におけることだけでなく、私たちの教会や地域活動のなかにも求められるものである。日本聖公会では、この一か月の間に3人もの新主教が誕生した。主教職の権威はあくまで機能的なものだが、そのゆえにこそ、その職務にはリーダーシップが問われる。司祭も同様である。聖職は牧者といわれ、その営みは司牧または牧会と呼ばれてきた。この「牧する」という言葉には、リーダーシップの意味が込められている。新主教は按手のときに司式主教によって「まことの牧者として主の群れを養い治める力と、教師として教え導く知恵と悟りを与え、信仰と聖典の擁護者として堅く立たせてください」との祈りを捧げられる。まさに教会におけるリーダーシップそのものが求められているのである。

聖公会では、リーダーシップよりは、むしろパートナーシップということが強調されてきた。訳せば「協働」となる。「体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である」(コリントの信徒への手紙一、12章12節)というパウロの言葉に基づく神学上の理念である。リーダーシップとパートナーシップとは対語ではあるが、相対立する

のではなく、相互補完的な意味をもつ。つまり、良きリーダーシップのもとにこそ良きパートナーシップが育つのであり、良きパートナーシップのないところには良きリーダーシップも育たないということだ。

日本聖公会には、管区の日韓協働委員会、大阪教区の在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会など、「協働」の名を付された委員会があるが、日本と韓国あるいは在日韓国・朝鮮人と日本人との協働、すなわちパートナーシップを実現するためには、これらの委員会が良きリーダーシップを発揮しなければならないと思う。

最近「協働」という言葉が頻繁に使われる社会教育の領域では、相互教育ということがいわれる。一方が先生で他方が生徒というような、教える者と教えられる者がいる形ではなくて、互いが互いに対して先生でもあり生徒でもあるという形である。ただ、全体を見通してコーディネイト役を果たすリーダーは必要だ。この場合、ある場面ではこの人、別の場面ではあの人というように、場面によってリーダーが変わっていく。したがって、リーダーシップというものは、ある特定の一人物に求められるのではなく、万人に求められるものなのである。ある特定のリーダーにすべての人が付き従っていくという時代は終わった。これからは、構成員ひとりひとりがそれぞれの分担する役割においてリーダー性を発揮するという形がベストだ。リーダーが存在するとすれば、協働する個々の動きを総合的に見て、必要なときに的確な判断を下すというのがその役目だろう。

NPO(非営利団体)法の成立によって、いくつかの問題をはらみながらも、市民活動や地域活動の団体が動きやすくなる。生野では、このたび「生野地域活動サポートセンター」が設立された。在日韓国・朝鮮人のための諸施設、障害者が働く作業所、学童保育所、診療所など様々な分野にわたる生野の地域活動が、文字通り「協働」していく。事務局の置かれる聖公会生野センターがリーダー役をつとめることになるが、良きリーダーシップを発揮することによって、良きパートナーシップを育ててほしいと願う。

(まつやま・けん 京都聖ステパノ教会信徒 大阪教区在日韓国・朝鮮人宣教協働委員会協力委員)

松山 献

同じ空間に生きること —地域社会での共存をめざして—

朴 時 夫

私が勤務する自立生活センターいけいけ・こいこいは、重度の身体障害当事者が中心となって運営し、大阪市の全身性障害者介護人派遣制度による介護者のコーディネイト部門と、福祉作業センター2カ所からなるグループである。生野区の地域性からして、日本人の身体障害者だけでなく在日朝鮮人の障害者のメンバーもいる。もちろんスタッフ、介護者のいずれも同様である。

ここから、生野という《在日》の多住地域において、障害者としてのだけの共通項でくくることの困難さがある。障害基礎年金を受給されていない30代後半以上の《在日》障害者、国民年金をもらえない《在日》高齢者ともども、長らく日本社会の福祉行政の谷間に置かれてきた。その結果、行政に対する「公的」な施策を求めようもなく、必然的に「自助」を強いられてきた。

また、区民に《在日》が含まれたとしても、日本学校の教室の場で民族教室(講師)や外国人保護者があっても、障害者の生きる場ではまだまだ個人の存在アピールの段階にとどまっている。精神障害者や共同作業所を運営するその家族会の構成メンバーにしても同じである。

地方公共団体や民間企業への就労にしても、《在日》障害者には障害者である前に「国籍条項」のハードルがある。障害者雇用促進にいたるまでハードルを越えさせないところがあまりにも多すぎる。

私個人の精神障害者との関わりは、鶴橋商店街にある精神科の荒川診療所のレクリエーションの手伝いから始まった。野外での焼き肉、ボーリング大会、いずれもレクリエーションを通してだけのものであった。それが、ある時、パートスタッフとして日常の診療所に身を置くことで、来院する《在日》の患者さんとの出会いの中で、日本人も含めた彼ら、彼女らの生野での生活の一端を見せられ少なからずショックを受けた。

と言うのも、私自身、生野区で生活するようにな

って10年近くなるが、それまでは意識することが無かった。精神科の診療所と生活する地域の両方で彼ら、彼女らと接することで、生活の場でどれだけ無視、排除されているかを日常的に目の当たりにしたからだ。地元であるからこそ、古い地域であるからこそ、隣近所の日常レベルでこうしたことが強固にあると言える。

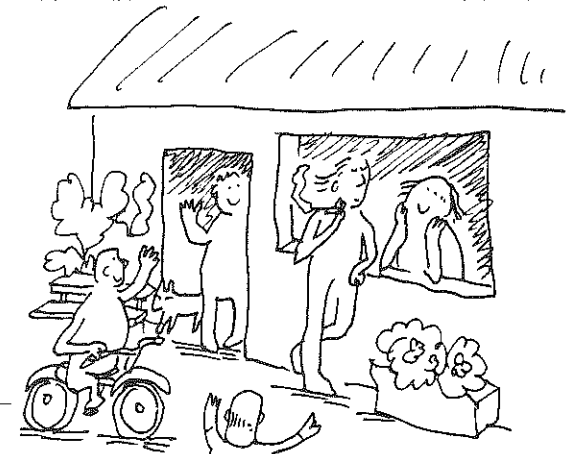
ともすれば、別の地域に集団としての新しい地域をつくるなどと夢想する誘惑に駆られたりもするが、その別の地域にしても地元の人々の意識はやはり同じことになる。そうではなく、生まれ育ったこの生野の地域に新しい場所をつくってこそ、無視や排除と闘える。

いけいけ・こいこいでは、荒川診療所や精神障害者の共同作業所(生野区、東成区)との当事者間の交流に取り組んで来た。レクリエーション、それにこちらの作業所への訪問交流、介護ボランティア的な関わり。今後とも、スタッフ間だけにとどまらず、日常における当事者の交流を目指したい。

最後に、日本社会と《在日社会》の間にある先述した状況を、障害当事者同士(また関わる者として)としての観点から、あえて差異と呼ぶことにする。生活の場、日常レベルでの多くの差異が存在する中で、その差異を無視することなく、生野という同じ空間で生きていくために差異を認め合って共存するという不断の努力を積み重ねていきたい。

(ばく・しぶ)

自立生活センターいけいけ・こいこい事務局)



安東国際仮面劇フェスティバルに行きましょう。

塩川 慶子

＜仮面劇って？＞

アジアは元来、月の動きをもとにした歴を使っていた。毎月初めは真っ暗な新月、十五夜は満月です。現代の都会の夜と違って、家の明かりすら心細い時代、満月の明るさはどんなに有難かったでしょう。狸囃子のお話じゃないけど、集まって腹鼓にあわせて踊ってみたくなるでしょう。とりわけ、韓国人はいなかつて大将のダイちゃんと同じで、音楽が鳴り出すと、自動的に踊り出す民族ですからね。

そんな十五夜の中でも、年初めの満月と八月十五夜は特別の日です。厳しい寒さも峠を越した新春の満月（二月中旬）と、暑さもすぎた中秋の名月、なのですから。厄払いと豊稔の願いを込めた祭事として演じられたのが、仮面劇です。神への奉納だから、両班を風刺したり茶化しても、この日だけは無礼講です。とはいえ、魔物より実害のある両班のこと、仮面に語らすほうが無難です。その他五日月だけど、田植えもすんだ端午などの節句にも演じました。

＜十数もの地方のタルチュムを一挙公開！！＞

民間伝承ですから、各地で少しずつ仮面も違い、節立ても違います。北朝鮮地方の面はホリ深くデフォルムされた面で、ダイナミックに踊り、南方釜山地方などでは、平面的で滑稽にデフォルメされた面で、軽やかなトッベギ踊りを取り入れています。韓国みやげによく見る写実的な木彫りの面は、安東河回村の面です。

老両班が若い妾を持ち、老妻と妾が争って老妻が死んで葬列が出たり、その妾が破戒僧や無頼漢といちゃつき、主人に咎められると主人の顎鬚で首をつって身の証しを立てようとしたり、生まれた子が、戯れの相手の面の小型だったり、シツチャカメツ

チャカに話が進みます。仕草でなく、科白で笑えたら、韓国語の実力は超1級ですが…。

仮面劇の直訳は仮面踊り。劇とか舞踊とかいうと舞台芸能のようですが、村の広場で演じられるのを、取り囲んで見るのです。会場では2つの広場で次々に演じられる各地の仮面劇を好きに選んで見ます。

＜河回村は村全体が世界文化遺産です＞

安東へ行けば、必ず見ておきたいのが河回村です。河に囲まれた村が李朝時代のままに保存されています。瓦葺の立派な両班宅や書院が十数軒、藁葺の下人の家が周辺に多数あります。民宿や韓国食堂になっている家もあり、古い時代にトリップするのも楽しいでしょう。民泊料金は安東市内のホテル並みの小奇麗な旅館と同じく2万5千ウォン位、というのをどうおもうかは、個人の価値観問題でしょう。

この河回村で期間中に一晩行われる夜間公演も見落とせません。両班は舟上で詩歌を吟じ、庶民は仮面劇で両班を茶化して遊びます。川面に映える舟上の篝火舞台背景になる芙蓉台の上から河に落火する松明、幽玄の一夜です。

＜仮面博物館で面に親しもう＞

韓国各地の仮面を展示する、「河回洞仮面博物館」もあります。出発前に大阪万博の民族博物館もに行き鳳山仮面劇などの韓国の面、日本の面、世界の面を見ておくと万全です。いつてらっしゃい

（しおかわ・けいこ）

聖公会生野センターでは第2回の韓国の旅を9月26日～29日、安東国際仮面劇フェスティバルを見に行きます。詳しくは聖公会生野センターまで。



生き様を描く

一慰安婦だったハルモニと私たち

＜3日に1回どこかで上映＞

この映画は、1995年韓国の映画館で上映され、1996年に日本で上映されました。

東京と大阪でのロードショウのあと、全国120カ所で自主上映されました。3日に1度以上は日本のどこかで上映された映画です。技術的にもまだまだ未熟なドキュメンタリー映画でしたが、多くの人が見たのは、日本軍慰安婦問題に対する関心が高まり、何とか解決したいと、多くの人が感じ、市民の手でこの映画を見ようという努力があったからだと思っています。

きっかけは、1990年。戦後50年が近くなった頃、韓国の金学順（キム・ハクスン）さんという方が、ある日、家でテレビを見ていたら、日本の国会中継のニュースが流れていました。日本政府の人が「あれは民間業者がやった事だ。政府とは関係ありません。」と言っているのを観て、「私がここにいるのに、体験者がいるのに、なんてうそをついているのだ。」と、50年間ずっと口を閉ざしてきた学順さんが口を開いたことをきっかけに、勇気を与えられた多くの女性ができて、運動が広がっていきました。また韓国だけでなく、日本でそれに応える人がいたり、アジアの他の国で、フィリピン、インドネシア、中国、台湾などのいろんな国々で同じような思いを持った当事者たちが名乗りをあげたのです。

＜日本軍慰安婦問題の3つの側面＞

日本軍慰安婦問題と言うのはまず民族問題の側面があると思います。植民地支配をした国、あるいは侵略して占領した国々の女を駆り出した民族差別の問題があります。また女性問題としての側面もあります。男性が女性を見るとき、性的な対象としてしか見ない、性欲の処理の対象としてみる。それが極端な形が、日本軍慰安婦問題です。また、階級問題

としての側面があると思います。とくに駆り出されたのは貧しい女性たちだったということです。

＜人間まるごとの姿＞

様々な問題をはらんだ日本軍慰安婦問題に取り組んでいる人たちの力も、この映画を多くの人に見させる土壌となりました。

でも、あえて画面の粗い、録音状態も悪いこの映画が、なぜ多くの人に見られたのかと言う事を考えると、日本軍慰安婦だった当事者の人間まるごとの姿を映し出しているというところに、共感するんじゃないでしょうか。たとえば、ねぎを刻んでいたり、絵を描いていたり、はとにえさをやったり、語りも何もなく、ただじっと座っているのを何秒も映しだしていたり。あと食べる場面がものすごく多いんです。食べてるか、寝てるか、飲んでるか。あと歌



っているところもあります。最後、忘年会のロングショットでずっと酔っ払ってる姿を映し出している、そのような彼女たちの生活の部分部分をカメラで撮っている。もちろんデモに出かけたり、昔の話をしたりしているところもありますが、それは彼女たちの生活を構成しているものの1つとして入っているんですね。監督は「この映画は告発映画じゃない。」って言っています。さっき言ったように彼女たちの生活をまるごと撮

る、そう見ていると思います。

＜撮影に入るまで1年半＞

制作の期間は93年から95年ですが、そのなかでも1年半ぐらいはカメラをぜんぜん使っていません。というのも、この映画を撮ろうという事で、監督がおばあさんたちに会いに行きましたが、おばあさんたちから拒否されたんです。それまで、日本軍慰安婦問題を取り上げる新聞・テレビなど、いろんなところに映った自分の姿や、それを見た人の受け取り

方が好きじゃなかったのです。そこで、監督は次の日からずっと、おばあさんたちの家に行って朝から夕方まで部屋の片隅で、じっと座っていたんです。1年半ぐらい続けて、「映画やらなくてもいいのか」と声をかけられ、撮影がはじまりました。というように信頼が深まったところで撮影され、すごく自然な姿で写っています。

映画の試写会を開いたときに、みんな重い問題で緊張していましたが、一番前で見えていたハルモニたちははじめから最後までゲラゲラ笑いつづけていたらしいんです。彼女たちにとっては、家族で撮ったホームビデオを見るようなそんな感覚らしいんです。楽しみながら見たようです。自分たちはいやな見せ方をされていないんだなと思えたらしくて、50年間ずっとあの体験、慰安所での体験があつてから、みずから一度も自分を好きになれなかった、50年間沈黙しつづけた、しかし、自分が描かれた映画を見て、人々がきちと見てそれを肯定してくれている。というのが「あなたはそれでいいんだよ」といわれた感覚になったのだらうと思います。

<自分自身を取り戻すということ>

たとえば韓国人の男性がこの問題について怒るときに、よその国の男に踏みこじられたという民族問題としての入り方しかできないという現実があります。それを裏返すと非常に強い貞操観念、我々の社会にこう



いった人を抱えるのは恥ずかしいんだ。という被害を受けた人が恥ずかしくなってしまう、そう思わせる伝統的思考方式があると思います。慰安婦問題についていろいろ語られますが、私たち自身の考え方も変えていかないと、ハルモニたちの名誉が回復されないように思います。そういうところにすこし風穴を開けるようにと心掛けているのがこの映画だと思います。つまり、被害者との関係の持ち方に新しい視点を提示したと思います。自分を肯定できるように見ていく。それは事件の被害の側面だけでなく全人格を見ていくような関わり方ではないかと思います。

<人間をまるごと今の自分につなげる事>

印象的なエピソードを一つ紹介しましょう。川崎での上映会でのアンケートに、すごく遠いところから来た方でした。20代の女性で男の人から強姦された経験があり、そのため、とても萎縮してしまって、人に会う事もできない。言葉もしゃべれなくなり、精神の病も抱えてしまった、そしてこれからどう生きていったら良いか見えない、という状況の中で、ハルモニたちの生活を描いた映画があるのを知って来られました。「映画を見てると彼女たちはあんなに辛い経験があつたのにあんなに元気に生きている。それを見て、私も何とか生きていけそうな気がします。」というような感想を書いてくれた方がいました。これを監督に伝えたら、彼女はこう言いました。「そういう今の自分につなげてみってくれるのが非常にありがたい」。

社会問題の被害を強調する事で、人間の関わり方としてそれ以上の域に越えられない、そういうものがあると思います。証言、それを受け止めたいという思いもありますが、証言を延々聞く事によって、

それだけで終わってしまう。つまり私たちが描く被害者というのは、同情的であるか、英雄視が多いと思います。「かわいそうにと涙を流す」か「尊敬する」かどちらかで、普通の人間としてみる事ができなくなってしまう、つまり自分の身には起り得ない、特別なことがあの人たちには起ったので気の毒だとか、あれだけの苦痛を受けながら今の生き方はすばらしいで終わってしまう。でもそういう被害の部分だけでなく、被害の部分を含めた人間まるごとを見ていくと、どこかで自分と共通の部分が見えてくると思います。人間的に親近感を感じると、日常の中できっかけがあれば、自分にも起る事かもしれない、と想像する事があるんじゃないでしょうか。また、社会問題、歴史の問題としての側面は当然ありますから、人間的に仲良くなるとはまた別の問題もあるんですが、人間としてふれあう感性をどこか自分の中に持ち続けて、ただ政治的解決、新聞の記事になっている「問題」として観る

より自分の事として見る事ができるようになれば、と思います。身近な事としてそうできるようになると、いまと例えば日本軍慰安婦問題で主張している事として5つあげることができます。——①この問題の真相をを明らかにする事。②それにもとづいて日本が国として謝罪する事。③そして謝罪した上で賠償する事。④亡くなった被害者を追悼し今後2度と起らないように、歴史教育の中で語り継いでいく事。⑤これは犯罪なので、犯罪者をきちんと処罰する事。——これらのことも、なにか一見固い政治的主張に見える事であつてもうなずけるようになると思います。

そういうことが、この生野の地域では、社会問題としての在日問題としてだけではなく隣の人が金さんだったり、ちょっと歩いたら市場があつてそこで買い物したりそういう中で、ニュースにでたら、ぐっと身近に感じる事ができる地域だと思うんです。それと同じような感覚で日本軍慰安婦問題を捕らえる事が出来ればうれしいです。

<さいごに・発言する責任として>

こういう思いの中で、これと反する事件が起きました。毎日新聞の「憂楽帳」というコラムにナムムの家IIの試写会のできごとを伝えるという記事があつたのですが、ところが、このコラムは始めから最後まで全部うそです。まず事件があつたというこの日に試写会は行われていません。始めから最後まで全部作り話なんです。この記事の問題としては事実を事実として書くという報道のあり方すら無視

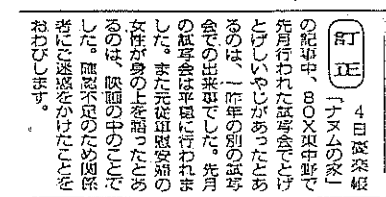
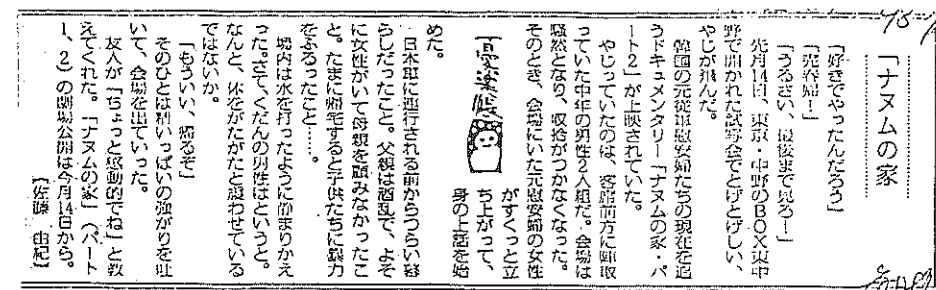
したとんでもないことです。多分これを書いた記者は個人としてはいい人でしょう。善意をもってこういうステレオタイプ化した記事を流せばずっと伝わるだろう。そういう発想の持ち主だと思います。

さらにびっくりしたのがその訂正記事です。ここにも間違いがあるんです。つまり、訂正を出すときも「こういう訂正にすれば多くの人が疑う事がないだろう」という先入観で書かれています。

私は、この記事はうそだと分かる立場にいたので、黙っているわけにはいかないし、インターネットに流したら2週間でも100通以上も返事がありました。会った事もない人から 闘いましょうとか、うやむやにしていけませんとか 励まされて、顔も知らない人たちですが、3月中旬に市民団体が発足する事になりました。

私はこの毎日新聞の記事に対する取り組みを考える時、マスコミの責任の大きさと真実の大切さを思いに持ちます。「日本軍慰安婦問題」というあくまで「問題」としてだけでとらえる時、今後も、善意であろうと悪意であろうと、このようなことが起ると思います。映画「ナムムの家」「ナムムの家II」で描かれているハルモニたちの姿を自分の生き様を重ねあわせつつ真正面から彼女たちの真実を見つめることができるならば、あのような「うその記事」は成立し得なかったはずなんです。この事件は私たちに一つのものをつきつけたと思います。「自分の目で見、自らの責任でもって表現する」というもっともあたりまで大切なことを……。 (了)

(日時：1998. 3. 8・文責：編集部)



I'M Fire! から I'M Fine! へ

今西 豊行

みなさんお元気ですか。私がこちらに来てちょうど1年。また、このコーナーを担当して1年。これが私の最後の“ソウル通信”となります。今回はやはり、今、韓国にとって切っても切り離せないテーマ“IMF”でしょう。

去年、インドネシアで起きた通貨危機は、タイ、マレーシアなどに広がり、12月に韓国に飛び火した。去年の8月頃は1ドルが900ウォン、1円が6.6ウォン前後だったのが、そしてわずか1ヶ月もしないうちに1ドルが2067ウォン、1円が14ウォンの大暴落となった。一時は“韓国”という国が、破産するのではないか？なんていわれたけれど、世界での貧しい国の一つになってしまいました。これに伴い、物

価の上昇、特に輸入品は無条件で引き上げられました。数人の方から、“豊行の生活に直接影響がある？”と心配していただいたので、物価動向のいくつかを紹介します。市内バス430→500、国内線航空料金平均18.6%、銭湯2500→3000、砂糖1kg900→1900、豆腐500→700、学食は1400のま

まですが、今まで3種類のおかずが付いてきたが、1つ減らされた。電気代引き上げに伴い、下宿のオンドルが利かなくなり一週間ほど風邪を引いた。私はほとんどの円を1円が8ウォンのところに替えたので、今のように1円が12ウォンとは考えられない。

一方、街に目を向ければ、国家通貨基金“IMF”を“I'M Fire”や“I'M Fail”と言う言葉が流行しているように少し暗いみたい。企業では女性を中心とした解雇。そうでなければボーナスカット。15代大統領就任式で金大中氏も“南北戦争(6.25)以降最大の試練期”と発言。主婦たちの間では“아나바다운동(アナバダ運動)”というものがある。“아껴쓰고 나눠쓰고 바꿔쓰고 다시 쓴다.”(大切に使用して、分けて使って、代えて使って、もう一度使う。)

国家危機は、主婦たちの協力があってこそ乗り越えられそう。また、ガソリンは800ウォンから1400ウォンそして1100ウォンと変わっています。最初引き上げられたときの出来事は、スタンドでお金を払わずに逃げることに、あの悪名高き渋滞がなくなりましたが、反対にスピードの出し過ぎによる事故が続発しました。現在は少し引き下げられたので渋滞が増えてきました。たんすの中に眠っている金を集め輸出し、外貨危機を克服しようという趣旨で始まった“金集め運動”。ある女性が25年前の結婚の際に受け取った金のネックレスが純度チェックで、偽物だと発覚し、あわてて逃げ出していた。もちろん、歴代から先日の長野オリンピックの金メダリストも提

供したが、金持ちの家に眠っている金は未だに集められていない。

その他は、アイドル系の出演が多い番組が打ち切りになった。こんな時代に派手なことをするなという理由なのだが、理解に苦しむ所だ。ウォン暴落で失望した在韓外国人とくに“不法滞在者”が自ら

出国している。日本人観光客が、免税店などで、海外ブランド品を買いあさっていると非難しているが、それやったら観光局の“おいでよ韓国へ”のPRはどうなんだ。極めつけが、午後2時から4時の間には結婚式を挙げる場合、披露宴では食事をしてはいけないと法律が改正され既に実施されている。韓国の披露宴は派手すぎるから。

しかし、いくら不景気だからといっても、根本的に明るい彼らは“I'M Fire”から“I'M Fine”と気持ちを切り替えて毎日を送っています。

すこしでも楽しく読んでいただけたら嬉しいです。では、こんどはハングル教室でお会いしましょう。

(いまにし・とよき 聖公会生野センター韓国語教室)



大阪考⑤

高二三

ツナギ

(和田徹著 1990年、新幹社刊)

定価：本体価格1500円



大阪在住作家・和田徹の短編集『ツナギ』を出して8年になる。『ツナギ』というタイトルは、当時とても売っていた吉本ばななの『ツグミ』に対抗してつけた書名で、著者のたつての希望で命名されたものである。大阪人らしい反骨精神であるが、ちりぢりこなごな、売れ行きに関しては全く相手にもならなかったから洒落にもならない。話題になったのが装丁で、その年のすぐれた装丁だけを集めたオールカラーのカatalogに掲載され、新幹社の本では後にも先にも『ツナギ』だけという代物なのである。

このような書き出しだと、なにやら中身のない作品集のように思われてしまうが、決してそうではない。それが証拠に和田徹さんは、NHKの創作落語の原作を書いて賞をとった。その後『小説現代』(講談社)の新人賞もとった。実力は折り紙つきなのだが、なぜだか売れなかった。この時ほど、出版社に力が無かったからだと真剣に思ったことはない。文学というジャンルほど、弱小出版社では力の及ばない分野はないのではないかと今でも思っている。

さて「大阪考」ということでこの連載を続けているので本題に入りたい。

『ツナギ』の中に収録されている「お富さん」、この作品も織田作之助賞の最終選考まで残った佳作である。まずは作品の内容を紹介しよう。

「昭和」三十年代の天王寺か天下茶屋の私鉄沿線に「お富さん」という歌だけを歌って、物もらいをしている若い「乞食女」がいる。その「お富さん」を吃音で学校になじめず登校拒否症となった少年の目からみた作品である。

まだ庶民が豊かでなかった時代、「お富さん」がや

ってくると、話し好きのおかみさんたちは彼女をとりまき、「ひとつ聞かせてや。」という「いやや、はずかしいわ」とお富さんは照れる。そして握り飯やら味噌汁やら沢庵が手渡され、手拍子が起こる。「お富さん」を三番の歌詞まできっちり歌う。彼女はこの歌しか歌えない。たまに「——しがねえ恋の情が——」と台詞まで挿入される。すると、おかみさんたちは古着などを持ってきて、それを彼女に与える。彼女からは「くれ」とひとことも発しないのに、大阪の、下町の、おかみさんたちの人情が一人の若い乞食女を支えて生きていくことができるようにしている。そんな世界が描かれている。

ところが変化が起きる。ある日、お富さんが赤ん坊を生んで連れてきたのである。赤ん坊を連れてやってきたお富さんは足りない母乳を補うため牛乳を求めたりするようになる。おかみさんたちに乞われなくても「お富さん」を歌い、「可愛いやろ、抱いたって」と言いながら、少なくなってきた「もらい物」を赤ん坊の分までしつこく要求するようになっていく。すると今まで道で遭うと気さくに声をかけていたおかみさんたちは、目が合うと何かと要求してくるお富さんを避けるようになっていく。「乞食暮らし」の中で、赤ん坊は栄養不足になり、汚れてくる。

そんなお富さん親子を少年たちはいじめめる。その少年たちの中に主人公もいる。お富さんをケガさせるのだが、逃げおくれ、その場にいたというだけで、心の傷としてずっと残ることになる。お富さん親子は施設に収容され、この地域に二度と現れることがなくなったからである。

何の変哲も無い日常の暮らしが描かれた作品であるのかもしれない。しかしながら、「昭和」三十年代の大阪の人情を、心の襞にまで触れて描いた秀作なのである。これは大阪だけに言えることでないのかもしれないが、「施し物」を要求したらアカンのやな、と思った。とっても表層的な読み方をする……だが。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

ツナギは聖公会生野センターでも
取り扱っています

잘 따라하네

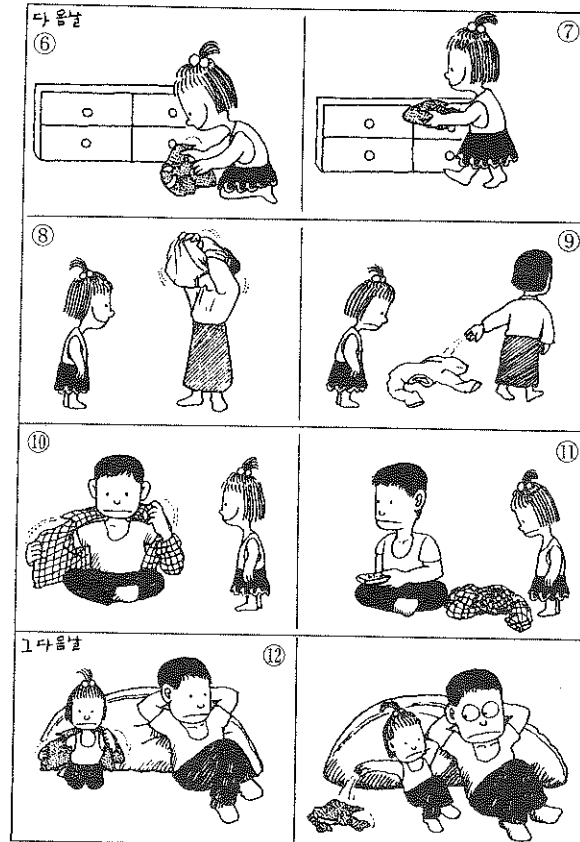
連載マンガ⑦

ちゃんについてきてね



⑥次の日
⑫その次の日

- ①服を脱いで、こうして、こうして
- ②こう。 ちがうちがう、そうじゃなくて
- ③こうするんや。 私がする、私がする！
- ④こうして…。そうそう。
- ⑤どう？ じゃそこにしまつて



作者：崔正鉉 (ちえ・じょんひょん)
パンチョギ(もう一方)の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。そのユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995年第1回平等夫婦賞受賞。

聖公会生野センター賛助者ご芳名

1997年4月1日～1998年3月31日(五十音順・敬称略)

紙面の都合上複数回献金して下さった方が多くいらっしゃいますが、後援会・クリスマス献金・一般献金のそれぞれ一度の掲載にさせていただきました。またここに名前のない方もたくさんいらっしゃいます。各教会・教区・団体などで、取りまとめて下さった方々です。その方々にもここで感謝の意を表したいと思います。ご支援ありがとうございます。

【後援会】

相原太郎 青柳美智子 秋山義孝 東敏勝 東直子 アトリエIK 尼子ユリコ 荒川百合 新木裕香子 有村一夫 安藤邦子 飯島正 飯田修 生野センター横浜教区友の会 池住圭 池ノ内隆二 石井義雄 石橋泰治 石橋聖トマス教会 泉迪子 伊勢田健 磯崎久 井田泉 一花恭子 井出一志 伊藤公 稲原三千 井原洋子 今井雅雄 今北富三 今中富美子 今中喜子 今村祥子 林芳子 林豊・七枝 岩井梅代 岩垂悦子 植田哲子 植松從爾 植松誠 宇野喜句子 宇野徹 江野隆夫 大音智恵子 大川千萬 大黒清一 大阪聖アンデレ教会婦人会 太田喜元 大野寿美 大野和香子 大野和哥子 大橋義 大山仁躬 岡野利治 岡本勝 奥康功 奥田壮一郎 奥田哲夫 小倉真市 納トヨ 小野晶子 小野綾子 小野田芳大 香川一憲 笠原由子 梶原史朗 柏原美男 片山春美 金宮春子 金光秀晃 加納実 軽井沢ショー 記念礼拝堂 川上竹治 河内理恵 川村直子 康愛子 姜恵楨 木川田一郎 木田江悦子 北関東教区ガブリエル委員会 北山和民 橋高紀雄 木下廣子 木村幸夫 鬼本照男 京都教区教務所 京都聖マリア教会 国津進 国津武 久保道則 久保潤彦 蔵田雅彦 倉本和 栗山義信 黒田順嘉 河野裕道 神戸聖ミカエル教会 香山よしの 越賀智恵子 越山健蔵 後藤一郎 後藤真 小西正人 小林正 小林尚明 小林満寿子 こひつじ乳児保育園 小堀孝子 小堀肇 小室一 齊藤壹 斎藤美枝 堺聖テモテ教会 桜井揚子 佐治孝典 佐藤悦子 佐野信三 鮫島留美 猿橋靖 三光塾 志賀成全 島田麗子 代谷宣子 菅田睦子 菅原与志一 杉本美津子 須佐美浩一 鈴木慰 清家智光 大阪教区婦人会 聖バルナバ病院サマリア会 関本肇 瀬山義美 高田須磨雄 高田茂登 高橋季代子 高橋敏子 高見澤國子 高宮建治 瀧山恒雄 武市温子 竹中達吾 竹林徑一 谷富夫 谷元郁子 近澤淑子 張聖子 張東煥 鄭炳熏 塚田理 筑田克夫 辻文雄 辻本敏子 辻本秀子 恒光昌彦 坪井克己 東京教区 藤間孝子 トータスハウス 特別養護老人ホームふれ愛の家 富谷晋 豊田英子 名出望 内藤昇 永嶋大典 中島路可 中野香津子 長野加代子 長野泰信 中原恵 仲村實明 中村大蔵 新村隆一 西宮聖ペテロ教会婦人会 西村逸郎 直川義人 橋本克也・玉枝 橋本禮子 畑野栄一 濱口幸子 早川善樹 榛木恵子 春名英夫 韓裕美 東豊中聖ミカエル教会 樋口敏夫 飛田雄一 平野淳子 広木佐代子 黄裕錫・金幸子 福岡教会婦人会 福堂佳子 藤木典子 藤谷正一 船木律子 古本純一郎 古谷利治 裴薫 ペンギンペリ 館 芳我秀一 堀貴美子 堀武 堀江育夫 榎マイチケット 前島素子 前田圭子 前田忠男 前田都 牧野恵美子 牧野道信 益海政一 松居勲 松岡度一 松岡寿子 松原栄 松本一郎 松本正俊 真鍋倫子 三木メイ 水谷博彦 水波淳水野忠 南康子 三村タミエ 三宅肇 宮嶋泰夫 武藤六治 宗像和雄 文公輝 本吉聰 森英雄・貞子 森中央 諸橋保夫 八尾恵三 八幡明彦・秋山幸美 山口佐栄子 山口光 山崎ホシ子 山下直子 山根由香 山野繁子 山本眞 梁淑子 兪澄子 尹文嬉 吉井清達 吉田淳二 吉本恵一 米村

路三 ヨルダン保育園 良善幼稚園 渡辺晴男

【クリスマス献金】

愛楽園折りの家教会 青柳美智子 秋山義孝 (有)アジア映画社 芦沢すま 尼子ユリコ 荒川百合 飯田茂信 池住圭 池ノ内隆二 石浦教良 石田浩子 石橋聖トマス教会 泉迪子 市川聖マリア教会 一宮聖光教会 井出商店 稲原三千 井原洋子 今北富三 今中喜子 林芳子 岩坂正雄 上田晴美 植松誠 梅本百合子 恵我之荘聖マタイ教会 大音智恵子 大川千萬 (株)大阪映画センター 大阪聖アンデレ教会 太田淑子 大田みさを 大野和香子 大野和哥子 岡本勝 小倉真市 小野綾子 景山恭子 柏原美男 金宮春子 金山浩子 金光秀晃 木川田一郎 北山和民 京都聖マリア教会 久保篤代 倉本和 栗山義信 神戸聖ミカエル教会 香山よしの 越賀智恵子 小林正 小林尚明 小林満寿子 小室一 堺聖テモテ教会婦人会 桜井揚子 佐治孝典 鮫島留美 三光塾 首里聖アンデレ教会 城下彰 真光教会 菅原与志一 杉本美津子 逗子聖ペテロ教会 聖十字幼稚園 聖心幼稚園 聖パウロ教会 聖バルナバ病院サマリア会 聖ヒルダ礼拝堂 聖ルカ教会 関本肇 空信一 高橋季代子 高見澤國子 高宮建治 武市温子 谷富夫 谷元郁子 千葉復活教会 千村なり 茶本博史 張聖子 張東煥 辻本敏子 東京聖テモテ教会奉仕会 藤間孝子 特別養護老人ホームふれ愛の家 富山聖マリア教会聖マリア保育園 豊田英子 長尾恵美子 長岡聖ルカ教会 中島路可 名古屋学生青年センター ナザレ幼稚園 新村隆一 西原裕之・智子 畑野栄一 濱口幸子 早川善樹 春名英夫 樋口仁子 平野淳子 黄裕錫・金幸子 プール学院中・高宗教部 福堂佳子 藤井英世 藤吉康司 藤原紘子 復活幼稚園 古本純一郎 前島素子 前田忠男 益海政一 松岡寿子 宮本一郎 真庭功 水谷博彦 水波淳 水戸聖ステパノ教会 宮嶋泰夫 宗像聖パウロ教会 桃山学院大学キリスト教センター 森英雄・貞子 盛田トモ子 森田喜之 森中央 諸橋保夫 八木基督教会 山口佐栄子 山崎ホシ子 山中幸雄 山本登 横浜聖クリストファー教会 吉田常夫 ヨルダン保育園 立教女学院

【一般献金】

青森聖アンデレ教会日曜学校・聖マリア幼稚園 浅草聖ヨハネ教会 阿部雅良 李福子 飯田茂信 石浦教良 石田浩子 伊豆聖マリア教会 岩坂正雄 ウィリアムロズリン 植松誠 大音智恵子 大川聖恵 大阪聖愛教会 太田喜元 大野寿美 奥田壮一郎 奥山俊秀 姜恵楨 関東三教区生野委員会 九州教区 神戸学生青年センター 小坂井文子 松陰中学・高等学校 須佐美浩一 聖公会九州教区婦人会 空信一 東京教区 豊田英子 中島康裕 日韓青年キャンプ信施金 橋本静香 藤原紘子 堀江育夫 水野忠 水戸聖ステパノ教会 武藤六治 宗像和雄 諸橋保夫 八尾恵三 山中幸雄 横田豊 吉岡美恵子 吉田孝子 立教小学校ボランティアグループ

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

○後援会費

年額 1口 3,000円 (個人)

1口 10,000円 (団体)

・郵便振込

00960-0-133429

「聖公会生野センター後援会」

□自由献金もよろしくお願ひします

・郵便振込

00910-1-321780

「聖公会生野センター」

・銀行振込

三和銀行 東大阪支店

普通預金 3711311

「聖公会生野センター」

■投 稿

◆大きな揺れから三年の月日が過ぎた、この揺れは、私の家や体だけでなく、心を含めた色々なところを揺さぶった。人と人の結びつきの大切さ、社会の中で小さく弱くされている人々の存在などなど。これらは、多くの人の死によって、やっと見えたことだ。彼らの死を無駄には出来ない、と思いつつ、本当は、もっと早くに自分たちを見つめ直し、気付くべきであった、とも思っている。悲しいことに、「復興」とともに、また、そんな大切な事柄が隠されつつある。上辺だけ繕った綺麗な町はもういらない、と叫びつつ、私の心を揺り動かしてくれるものを求めている私。地震はこりごり。だけど、心にズシンと衝撃を与えてくれるものは欲しい、と思っている。でも、虫のいい話ではあるが。そんな私にとって「生野センター」の活動は、そこから発信される様々な事柄は、心を動かす衝撃波だ。もっともっと正面からその波を受けて、揺らされ、その波を他にも伝えていきたいと願っている。

(坪井智:尼崎聖ステパノ教会)

◆息子達が小さかった頃、いろんな果物の種を庭に埋めた。そこは造成中の大学キャンパスの一隅だったが、いつのまにか芽を出し育った木は実を結んだ。ピワ、柿、みかんなど。昨年、そのキャンパスで三十数年、学生という若苗を育てていた夫が定年退職した。「これからは、山に木を植える人になる。」と決めた夫に、私は「あとについて、水を注ぐ人になる」ことにした。夫唱婦随とはこのこと？熊野詣や那智の滝で知られる和歌山県の熊野川町、一見深々とした緑に覆われているようだが、松くい虫や酸性雨などで立ち枯れた森が増えている。そこをあらけて(土地の言葉で手入れをして新しくする)花も実もある木を植える「甕れ森」

キャンプに参加。昨年は花見がいつかできるように(地酒太平洋はおいしい!) 今年はやまももを植えてきた。

「木を育てるには愛情が一番」という植林指導の方の言葉を大切に、続けていきたい。

(藤間孝子:聖ルシヤ教会)

聖公会生野センター会計報告

1997年4月1日～1998年3月31日

収入の部

分担金	2,620,000
後援会	2,923,658
寄付・献金	1,049,010
クリスマス献金	876,000
3. 1 信施金	2,000,000
プログラム収入	1,709,220

小計 11,186,995

センター資金取り崩し 2,010,870

合計 13,197,865

支出の部

活動費	3,809,561
事務諸経費	2,301,671
人件費	6,246,162
通信費	840,471

合計 13,197,865

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003 大阪市生野区小路東1-17-28

TEL 06-754-4356 / FAX 06-754-4357

e-mail cyj02040@niftyserve.or.jp

発行人：木村 幸夫

編集人：大橋 襄